

日本語学会第 146 回大会  
発表要旨  
The 146<sup>th</sup> Meeting of LSJ  
Ibaraki University, 15-16 June 2013  
Abstracts of oral presentations, workshops and poster presentations

<<口頭発表 Oral presentations>> (2013 年 6 月 15 日)

【A 会場】 司会：(1-2)呉人恵 (3-4)内海敦子 (5-6)津曲敏郎 (7-8)斎藤純男

[A-1]

「私-市長 私-だった」：ナワトル語における名詞の指示対象人称標示

佐々木 充文

名詞が主語人称標示を直接とって名詞述語としてはたらく現象は多くの言語にみられるが、ほとんどの場合、人称変化するのは述語名詞に限られ、動詞の項名詞やコピュラ文の補語名詞は人称を標示しない。

これに対し、ナワトル語 (Nahuatl) では、名詞の「主語」人称標示が、述語名詞のみならず項名詞や各種の補語名詞にも現れるため、先行研究では、ナワトル語においては名詞も動詞同様に述語的であるとする汎述語的 (omnipredicative) な解釈を提案している。

本発表では、古典ナワトル語において、汎述語的解釈では説明できない例があることを示し、R 標示の新たな解釈を提案する。R 標示は、形態論的には個々の名詞に現れるが、統語的には名詞句単位で起こる現象である。また、R 標示と名詞語幹との間には必ずしも主述関係はなく、単に当該の名詞句の談話参与者役割を標示していると考えられるべきである。

[A-2]

「父は並ぶもののない長者だった」  
—アイヌ語における関係節を用いた最上級表現—

ブガエワ アンナ

アイヌ語は、後置詞残留が全般的に可能な言語として知られており、それは特に付加語を関係節化する際に顕著である。本発表では、最上級を形成するための関係節を用いた慣用表現に焦点を当てて考察する： $a_1=ona_2$  [pak-no<sub>3</sub> nispa<sub>4</sub> isam<sub>5</sub>] nispa<sub>6</sub> ne<sub>7</sub>. lit. 「私の<sub>1</sub>父は<sub>2</sub> [(その人) まで<sub>3</sub>

(の) 長者<sub>4</sub> (が) いない<sub>5</sub>] 長者<sub>6</sub> である<sub>7</sub>」。この場合の主節は等価コピュラ構文（「私の父は長者である」）で表現されており、そのコピュラ補語（「長者」）が関係節によって修飾されている。この関係節では、主語は常に主要部名詞と同一の NP で表され、述語は必ず *isam* 「存在しない」となる。関係節中の主要部名詞は、欠落した (gapped) NP 「(その人)」と残留した (stranded) 後置詞 *pak/pak-no* 「まで」とによって指し示されているように、到達点を表す付加語としての機能を果たしている。このような関係節を用いた最上級表現は、本発表による新たな発見であり、また、通言語的に見て珍しいものである。

[A-3]

長屋 尚典

ラマホロット語(オーストロネシア語族中央マラヨ・ポリネシア語派)は譲渡不可能所有と譲渡可能所有で異なる所有標識を用いる。接尾辞 -N は譲渡不可能所有に用いられ、所有物名詞の語末母音の鼻母音化として実現する。一方で、前接語 =kã は譲渡可能所有に用いられる。本稿の目的はこの二つの所有標識を名詞化との関係で分析することである。本稿の主な観察は以下の五つである。第一に、これらの標識は、所有を表現するのみならず、形容詞・動詞を名詞化したり、感嘆文を形成したりする。第二に、名詞も形容詞も動詞も、-N をとるか=kã をとるかで、二つのクラスに分けられる。第三に、この言語の名詞修飾構文ではこれらの標識によって名詞化された要素が用いられる。第四に、歴史的には -N の方が =kã より古いと推定できる。最後に、複数の所有標識がさまざまな派生的機能を持ちながら名詞・形容詞・動詞で横断的に使用される現象はオーストロネシア諸語の中でも珍しい。

[A-4]

レアリティ概念からみたインドネシア語の *kalau*・*jika*・*bila* 条件文の用法

アリ アルタディ

本研究は、レアリティ概念を基にしてインドネシア語の接続詞の *kalau*, *jika*, *bila* の条件文の用法を分析する。前田直子(2009)によれば、レアリティとは、言語によって表された事態と、現実との事実関係である。このレアリティ概念から見ると、*kalau*、*jika*、*bila* の共通点は、仮定的の仮説条件文と反事実条文、非仮定的の一般と習慣を表す条件文の用法が用いられるが、どれも非仮定的一回限りの出来事は用いられないという点である。一方、相違点の1つは、*kalau* の反事実条件文で前件は事実と後件は反事実という用法が用いられるが、*jika* と *bila* にはこのような用法が現れにくい。インドネシア語の3つの条件文は意味や用法においては、日本語のト・タラ・レバ・ナラのいずれとも一致していない。しかし、使用範囲からみると、*kalau* は「レバ」に似ている。

[A-5]

サハ語(ヤクート語)の引用における対格名詞句

江畑 冬生

本発表ではサハ語の引用のうち、引用される内容が命令の場合を特に取り上げる(これを引用命令と呼ぶ)。サハ語ではふつう、引用内容の聞き手は与格で現れる。ところが引用命令には、引用節の「意味上の主語」(常に引用内容の聞き手に相当)がしばしば対格名詞句で現れるという特徴がある。コーパスおよびエリシテーションによる調査を行った結果として、本発表では以下のことを新たに主張する。[1] 引用命令では、命令法の動詞述語の後方にモダリティを表す接語が現れることができない。[2] 引用命令において現れる対格名詞句は、引用節中の「対格主語」と見なすのではなく、引用節の外側に置かれていると解釈しなくてはならない。[3] 引用命令では、引用部分の節としての独立度が低い。[4] 引用命令は、間接話法的な特徴と直接話法的な特徴を併せ持っている。

[A-6]

エヴェンキ語に複合語はあるのか 一名詞句内の語結合の方法について

松本 亮

ツングース諸語に属するエヴェンキ語は、周辺の言語とは異なり、語形成方法としての複合や、名詞句内の接続による語結合方法を持たない。派生による語形成と、一致および相応による語結合方法だけを持つと記述され、これが規範とされてきた。しかし現代のエヴェンキ語による資料を観察すると、この規範に反し、一致をしめさず接続による語結合の例が多く見られる。整理すると、複合語として解釈されるもの、形容詞派生接辞や格接辞などで結合関係が明確なものに一致がみられないことが分かった。以上のことから、本発表では、エヴェンキ語の中で新たな語結合方法として接続が許容され、その理由の一つとして複合語が存在することを主張する。

[A-7]

モンゴル語における preverb と動詞との間の結合度

梅谷 博之

モンゴル語（ハルハ方言）の preverb は、動詞の前に現れ、動作が急激に行なわれることを表す形式群である。本発表では、preverb とそれに後続する動詞の結合度について論じる。はじめに、結合度が強いことを示す言語事実がある一方で、弱いことを示す事実も観察されることを述べる。具体的には次の点から記述する：(1)preverb と動詞の間に自立語や付属語が入るかどうか、(2)preverb の重複が可能かどうか、(3)「preverb+動詞」への派生接辞の付加が可能かどうか。本発表の後半では、ある側面からは語の一部と呼べるが別の側面からは一語とも呼べる preverb を、その自立性の点からどのようなものとして認めるべきか、という問題に言及する。この問題は直ちには解決できず、モンゴル語の全体像を見る必要があるが、そうした全体像を把握する為に、今後記述を進める必要がある現象を提示する。

[A-8]

満洲語文語の可能表現に見る文法化の展開

山崎 雅人

満洲語文語の可能表現には、bahambi 《得る》>udame baharakū 《買えない》、bahanambi 《理解する》>niyalma be jeme bahanambi 《人を食べることができる》、etemi 《勝つ》>jojin-i muheren be jafaci eterakū 《力づくで轡を制することもできず》、mutemi 《能力がある》>yabume mutere gojime, deyeme muterakū 《歩けるが飛べない》、ombi 《なる》のほか、bahambi の副動詞 bahafi 《～を得て》を用いる形式（bahafi jiderakū 《来られない》は「可能」、bahafi salirakū 《勝手は許されない》は「許可」、adaram bahafi simnemi 《試験があるはずはない》は「推測」）がある。本発表ではこれらを文法化という観点から分析する。

【B 会場】 司会：(1-2)野村益寛 (3-4)本多啓 (5-6)三宅知宏 (7-8)芝垣亮介

[B-1]

英語の by way of から見る多義と同音異義

平沢 慎也

現代英語の by way of の意味には二つのグループが認められる。一つのグループでは、「〈場所〉を經由して」↔「〈場所〉を經由することを手段として」↔「〈手段〉によって」という意味の繋がりが見られる。経路と手段が結び付けられるという一般的な現象である。もう一つのグループでは、「〈行為〉のつもりで」↔「〈人・物・事〉の事例として(の)」という繋がりが見

られる。この繋がり、(行為)のつもりで何かを行う場合にはその「何か」は(行為)の事例である、という事情から生じるものである。

この二グループの間の意味の繋がり、中英語の用例を見て初めて自然な形で説明できる。これは、by way of が共時的には同音意義性を有していることを意味している。

[B-2]

「V 落とす」と「V 漏らす」における意味的制約：概念メタファーの観点から

森博

本発表は、「落とす」と「漏らす」それぞれが結合可能な前項動詞にかかる意味的制約を分析し、「視覚情報」と「聴覚情報」の異なる概念メタファーが関与していることを示す。本研究のコーパス調査によって明らかになったことは、「落とす」と前項動詞の結合は「見落とす」のような「視覚情報」及び抽象的な「把握・理解」が一般的である一方、「漏らす」は「聞き漏らす」のような「聴覚情報」の伝達を表す場合が最も基本的である。「V 落とす」の中で「見落とす」が圧倒的に多い原因は、「見ることは物理的に接触すること」及び「理解することは見ること」(Grady 1997)という概念メタファーが定着したためだと思われる。それに対し、「聞く」対象である「聴覚情報」と「漏らす」対象である「液体」の間の対応関係を成立させるには、「聴覚情報のやりとりは液体(連続体)のやりとり」という概念メタファーの介在が考えられる。

[B-3]

形容詞の肯定・否定のスケール性に関わる意味・機能変化に関する一考察  
—日本語形容詞「やばい」を中心に—

阪口 慧(Kei SAKAGUCHI)

本発表は日本語形容詞「やばい」を中心に否定的意味の語の肯定的意味・強調詞としての機能の獲得の動機付けに関して認知言語学の観点から考察を行う。当該の現象は現代の日本語に限ったものではなく、歴史的な変化及び、他の言語にも観察される現象である。例としては、日本語「すごい」、英語 "wicked", "ridiculous" "pretty"等の肯定的意味の獲得や強調詞化などである。このような評価・判断・感情に関わる形容詞は、意味の構造内に肯定・否定のスケール性を持つものと考え、スケールの変容が当該の現象を生じさせるものとして考える。また、当該の変化をもたらす概念操作として【絶対値化：肯定性・否定性の度合いのみを抽象的なスキーマとして取り出す概念操作】を想定し、本発表での説明が日本語形容詞「やばい」に限らず、他の形容詞の同様の変化、また他の品詞の変化に関しても応用が可能であることを示したい。

[B-4]

Language-specific patterns of motion event description by Japanese and German speakers

Naoko Tomita

This study addresses two types of motion events, which have not systematically been studied in prior empirical research within the framework of Talmy's typology of lexicalization patterns: (a) 'boundary-reaching' events, and (b) 'ongoing' events. Oral descriptions were elicited from speakers of Japanese and German by using short video clips. These descriptions were analyzed with regard to how information about MANNER, VIA/DIRECTION and GOAL of the same directed motion is expressed.

The main results are as follows: First, the proclaimed PATH conflation in the main verb could not be confirmed for Japanese. Second, the main cross-linguistic difference concerns the frequency with which GOAL is included in an event description. The results will be discussed in respect of language-specific schematic event representations.

[B-5]

借用語における形態素脱落の実態：-ed/-ing の場合

眞野 美穂・樋口 薫乃

言語が他の言語から語を借用する時、音韻的・意味的・形態的な側面において様々な変化が起こることは広く知られている。本研究では、未だ脱落率などの詳細な調査が行われていない日本語における形態素脱落現象の実態について、特に英語からの借用語に焦点を当て、-ed/-ing という統語的な役割を担う形態素について調査する。その結果から、形態素脱落現象には音韻的な要因だけではなく、形態的要因も関与していることを主張し、通時的な変化についても論じる。音韻的な側面からは、(1) -ed は -ing よりも形態素脱落を起こしやすいこと、(2) -ed の脱落率は原語の発音に影響を受けることから、聞こえ度の関与を指摘し、形態的側面からは、当該形態素が含まれる要素の性質による脱落率の違い（派生語<複合語の構成要素）を示し、その要因の分析を提示する。また、通時的には形態素脱落率が低下傾向にあることを示す。

[B-6]

語彙的複合動詞の自他交替  
—他動詞化・再帰化を中心に—

日高 俊夫

語彙的複合動詞 (Lexical V-V Compound; LVC) の項交替については、影山 (1993) , 松本 (1998) , 由本 (2005) 等も言及し、須賀 (1983) , 西尾 (1988) 等の記述的研究はあるが、理論的には、最近になって陳 (2010) や小川・新沼 (2010) , 日高 (2012) , 史 (2012) , 影山 (2012) 等の分析が出てきたところである。そしてこれらは、「積み{重ねる/重なる}」「炊き{上げる/上がる}」のような、「自動詞化」と思われる現象を議論している。本発表では、LVC には、単純動詞と同様、他動詞化や再帰化も存在することを指摘し、他動詞化については影山 (1996) , 再帰化については国広の一連の研究 (それぞれ単純動詞を分析している) を下敷きにして説明する。基本的にはLVCの場合も単純動詞と同様の説明が可能であるが、同じ動詞をV2にもつ場合でも、V2に対するV1の意味的貢献の仕方の違いにより他動詞化や再帰化の可否が異なることを示し、それを形式化する。

[B-7]

The distribution of zero particles and markedness in Japanese dialects

Natsuko Nakagawa

This paper investigates the distributions of zero vs. overt particles in Standard Japanese (SJ) and Kansai Japanese (KJ). Based on native speakers' judgements and a corpus study, it shows that the case-coding systems vary depending on the information structure of a sentence following the hierarchy (1).

(1) A > agent-like S > patient-like S > P

With Focused NPs, NPs on the right side in (1) tend to be overtly coded, Non-Contrastive Focus coding in SJ is realized as split-intransitive system, while in KJ it is realized as ergative-absolutive system. With Topicalized NPs, on the other hand, NPs on the left side in (2) tend to be overtly coded. This paper argues that these distributions can be explained in terms of markedness.

[B-8]

ヤスイ・ニクイの意味決定に関与する「性質の帰属先」

動作の難易を表すヤスイ・ニクイの意味決定には動作の意志性、格シフトが関与しているといわれる(井上 1976, 佐藤 1988)。しかしながら意志性の認定や格シフトと意味との関係については問題点が見られ、それらのみを意味決定の要素とは認めにくい。そこで本発表では形容詞性接尾辞であるヤスイ・ニクイが何の性質を表示しているのかという「性質の帰属先」について着目した。ヤスイ・ニクイの性質の帰属先となりうるのは、大きくわけて動作の主体と非主体である。ヤスイ・ニクイが難易の意味を表すのは、性質の帰属先が動作の非主体となっている場合のみであり、動作の主体が帰属先となる場合、ヤスイは傾向を、ニクイは心理的抵抗感を表しているという解釈に傾く。この事実から、性質の帰属先がヤスイ・ニクイの意味決定に関与していることを主張する。論の後半では、新聞コーパスから採取した例文観察を通して主張の妥当性について検証する。

【C 会場】司会：(1-2)張麟声 (3-4)井上優 (5-6)青木博史 (7-8)斎藤倫明

[C-1]

假定複文接続表現の日中対照

—“如果 p, 就 q”、“如果 p, 那么 q”、“如果说 p, 那么 q”構文を中心に—

馬 一川

假定複文において、日本語は一つの接続表現で接続関係を表すのに対し、中国語は假定節関連詞と主節関連詞の二つの接続表現と、その動的な組み合わせ方で表す。本発表は、中国語の主節関連詞“就”と“那么”、假定節関連詞“如果说”をそれぞれ考察し、時間性と仮定性の観点から、日本語の条件表現との対応関係を検討した。

①“就”は時間性を提示することができ、假定複文において「推論上の近接性」を表す。“那么”は表さない。日本語の場合は、時間性を強調する「ト」・「タラ」から時間性を強調しない「レバ」・「ナラ」へと次第に「推論上の近接性」を表す意味が弱くなる傾向がある。②“如果说”は仮定性プラス話題性の表現である。日本語の場合は、「ナラ」・「レバ」から「タラ」・「ト」へと前節の仮定性を強調する傾向が次第に弱くなり、話題性を提示することも次第に困難になる。

[C-2]

中国人日本語学習者による物理・精神活動動詞に対する格助詞「ニ」と「ヲ」の習得

早川 杏子・玉岡 賀津雄・初 相娟

母語に格標識を持たない中国人日本語学習者を対象に、今井(2000)の分類に基づいた物理活動動詞(物理動詞)・精神活動動詞(精神動詞)の動詞特性と格標識に対する習得との関連について、調査紙による助詞選択テストを行った。読解テストを基に、読解能力別に上(n=40)、中(n=42)、下位(n=51)群に分け、精神・物理動詞、助詞、自他、読解能力、助詞選択の正誤で決定木分析を行った。読解力の違いが動詞に対する助詞選択課題の最も強い要因であった。上位群では、精神動詞+ニにおいて自他の別が影響した。中位群では、精神・物理動詞の違いが最も強く、物理動詞の場合、ニ格の習得が遅れていた。下位群では、助詞の違いが最も強く、ヲ格の場合は精神・物理動詞が、ニ格の場合は自他がその次に強い要因となっていた。全体として、読解力が高くなるにつれて助詞選択の正答率も高くなるが、他の要因は複雑な影響関係をみせた。

[C-3]

中国人日本語学習者の場所を表す格助詞「で」と「に」の習得に及ぼす諸要因

中国人日本語学習者を対象に、場所を表す格助詞の「で」と「に」の習得を48問の刺激文を使って検討した。言語的な要因としては、(1)動詞の難易、(2)自他動詞、(3)格助詞の前に来る名詞の位置・地名の別、(4)格助詞の「で」「に」の4つの変数を設定した。加えて、201名の中国人日本語学習者に対して16問の読解テストを行い、その得点で上・中・下に分け、これを読解力として5つ目の変数とした。格助詞の正誤をこれら5つの変数で予測する決定木分析を行った。読解力で分けた上・中・下の群の影響が最も強かった。読解力が上がるほど、場所を表す格助詞の正答率が上がる。さらに、上位群では、地名と位置の影響が見られた。また地名では動詞の難易、位置では格助詞の「で」「に」が影響した。中位と下位群では、語彙力を反映した動詞の難易が影響した。全体として、読解力が第1の習得要因であり、次に他の4つの要因が複雑に影響していた。

[C-4]

韓国人日本語学習者による漢語サ変動詞の処理に及ぼす母語の影響 - 眼球運動による測定

朴 善娟・玉岡 賀津雄・Michael Mansbridge

日本語と韓国語での軽動詞付加の違いが、韓国人日本語学習者の日本文の処理に影響するかどうかを検討した。日韓両言語に共通する漢字語に能動態(-*suru/-hada*)と受動態(-*sareru/-doeda*)の軽動詞が付加されるかどうかで漢字語を3グループに分けた。日韓両言語で軽動詞付加が可能なG1、日本語は軽動詞付加が可能、韓国語は不可能なG2、日本語は受動態軽動詞が可能、韓国語は受動態軽動詞が不可能のG3である。各条件で8語ずつ漢字語を選び、3つの句の短文[S NP [VP Adverb V-軽動詞] ]を作り、文正誤判断に要する眼球停留時間を測定した。日韓で軽動詞付加が共通しているG1の文処理で停留時間が短く、促進的な影響がみられた。一方、日韓で軽動詞付加に違いがある場合に、停留時間が長くなり、抑制的な影響がみられた。日本語の漢語サ変動詞の文処理において、母語の韓国語の影響が強く観察された。

[C-5]

「の(だ)」文と「わけ(だ)」文の比較：命題選択の観点から

五十嵐 啓太

「の(だ)」文と「わけ(だ)」文は、(1)に示すように、しばしば同じ文脈で用いることができる。

(1) 佐藤も鈴木も休んだ。つまり5人しか来なかった {んだ/わけだ}。

(日本語記述文法学会 2003: 190)

この2つの形式の意味論的共通点・相違点は角田(2004)で詳細に論じられているが、いくつかの問題点があるため、新たな視点から2つの形式の意味的側面を分析する必要がある。そこで、本発表では、命題集合から命題を選択するという思考過程に注目し、(2)に挙げた「の(だ)」文と「わけ(だ)」文の意味的共通点・相違点を主張する。

(2) 共通点：「の(だ)」文と「わけ(だ)」文は、文脈上想起された命題集合から命題が選択された際に用いられる。

相違点： i. 「の(だ)」文は当該命題が選択の結果得られたものであることを表す。

ii. 「わけ(だ)」文は選択された命題と、先行命題の間に因果関係が存在することを表す。

[C-6]

クナイ・ジャナイの縮約率の分析—一般化線形混合モデルを用いて—

原田幸一

近年、文末のクナイ?・ジャナイ?で縮約形クネ?・ジャネ?の使用が目立つ。首都圏若年層の日常会話をデータとし、クナイ?・ジャナイ?の縮約率と音調・性別との関連を、一般化線形混合モデル(ロジスティック回帰)を用いて分析した。音調は、とびはね音調・非とびはね音調の2群とした。個人差をランダム効果として分析を行った結果、音調と性別の縮約率への効果が認められた。とびはね音調は非とびはね音調より縮約率が高く、男性は女性より縮約率が高い。個人差を捨象し縮約率を算出すると、音調の2群によって層別化しても男女差が存在すること、男性のとびはね音調で縮約形の使用が典型であること(クナイ?縮約率:57.6%、ジャナイ?縮約率:71.4%)などが分かった。とびはね音調では、~クナイ?・~ジャナイ?でアクセントの下がり目がなくなり、句末の上昇音調付与部の拍数が長くなったことで、句末を短くする傾向が現れた可能性を指摘した。

[C-7]

オントロジー体系を用いた名詞述語文の意味記述

今田水穂

本発表ではSUMO(Suggested Upper Merged Ontology)を利用した名詞述語文に対する意味アノテーションの可能性について論じる。SUMOは個別オントロジーの統合のために開発された上位オントロジーである。京大コーパスから抽出した名詞述語文に対してSUMOによる自動付与を行い、約84%の名詞にSUMOクラス名を付与した。従来の研究では名詞述語文を構成する名詞(句)の中に1項述語相当のものがあることは指摘されてきたが、2項述語相当のものについてはあまり論じられなかった。しかし自動付与結果を人手修正したものを調べると、2項述語的名詞が多様な統語的位置に生起することが分かった。本発表では実際のアノテーション事例を通じて、多様な名詞述語文の意味を体系的に記述するために2項述語的概念の分析が重要かつ不可欠な課題であり、また意味記述のための強力な手段となることを示す。

[C-8]

移動を表す複合動詞「V+込む」の統語的分析

秋本隆之

複合動詞のうち、「統語的」複合動詞の分析に加え、いわゆる「語彙的」複合動詞(影山1993)も、近年統語論的アプローチからの分析が盛んに行われているが(Nishiyama 1998, 2008; Nishiyama & Ogawa 2011)、語彙的複合動詞に分類される「V+込む」(例:太郎が交番に駆け込んだ。)は、共起できる動詞の範囲が他の語彙的複合動詞とは異なることなどから特殊であるとされ、統語的分析は未だ十分ではない(cf. Hasegawa 2000)。本発表では、Pykkänen(2002)が仮定した機能範疇 Appl(icative)を用いて、移動を表す「V+込む」型複合動詞の統語的分析を提示し、「込む」はHigh Appl(Pykkänen 2002, 2008)に対応する形態素(接辞)であると仮定することによって、本分析では、移動を表す「V+込む」型複合動詞が示す(i)着点を表す二格名詞句を導入する、(ii)単独では動詞として生起できない、(iii)他動性調和の原則に従わず、どのタイプのV1とも共起できるという三つの特殊性(影山1993)が無理なく捉えることが出来ることを示す。

【D会場】司会：(1-2)伊藤智ゆき (3-4)福井玲 (5-6)田中伸一 (7-8)田端敏幸

[D-1]

中国黒竜江省尚志市で話される朝鮮語の複合語アクセント

李文淑

本発表では、中国黒竜江省尚志市で話される朝鮮語（尚志方言）の複合語アクセントについて考察する。尚志方言は、多くの部分で慶尚道方言との類似点が見られる（慶尚道からの移住者が90%以上である）。

慶尚道方言の複合語アクセントは、基本的に前部要素決定であるが、尚志方言の複合語アクセントも、基本的には前部要素決定である。一方、慶尚道方言には見られない特徴がある。

・前部要素が1音節語の場合：1音節語はアクセントの対立が失われ、すべての語がH(H)で現れるため、前部要素・後部要素のどちらが複合語アクセントに影響しているのか判断が難しい。しかし、同じ音調型の組み合わせの語が複合語になると、異なるアクセントで現れる。更に、複合語アクセントが同じ場合でも、助詞を付けると異なるアクセント型で現れる場合がある。このように、現在は区別されなくなった1音節語本来のアクセントが、複合語又はそれに助詞がついた場合に現れたものと考えられる。

・2音節語+2音節語：後部要素が、慶尚道方言のLH(L)に対応するLL(H)の場合、複合語のアクセントは前部要素に関係なく、必ずLLLHで現れる。一方、前部要素が慶尚道方言のLH(L)に対応するLH(H)の場合、複合語アクセント規則は一定せず、前部要素決定の例と後部要素決定の例が混在している。後部要素決定型が見られる点は、慶尚道方言のLH(L)と並行的である。

尚志方言の複合語アクセントは慶尚道方言と多くの類似点を見せながら、複合語規則の一部が適応範囲を拡大・変容させている点など、独自の発展を示している。また、単純語において失われている対立が複合語に保存されている点も、慶尚道方言アクセントとの関連性を調査する上で重要である。

[D-2]

韓国語ソウル方言の平音・激音・濃音の実験音声学的研究

-先行母音と後続母音における高さ、強さ、およびフォルマントの時間的变化について-

韓喜善 (ハン・ヒソン)

ソウル方言の平音・激音・濃音の弁別については、VOTが最も有力な知覚判断の手がかりと考えられてきたが(Lisker and Abramson 1964)、Cho, T. (1996)による母音の入れ替え実験を通して、後続母音に注目する必要があることが示された。具体的な音響的特徴として、母音の全区間において上記3子音間の差が認められるF0、母音開始部における強さの立ち上がり、CVフォルマント遷移、倍音成分の強さの差が考えられる。

本研究では、平音・激音・濃音に後続する母音の開始部の影響を検討し、それが3子音の弁別の決定的な手がかりではないことを明らかにし、音響分析で後続母音全長を通して3子音間で差が見られた高さ、強さおよびフォルマントとそれぞれの遷移について、より客観的なデータを提示した上で、平音・激音・濃音の弁別においてそれぞれの項目の遷移がどのような意味を持つかについて考察を行なう。

[D-3]

韓国語の麗水突山方言の用言のアクセント

姜英淑

本発表では、韓国語の麗水突山（ドルサン）方言の用言の活用時のアクセント特徴について考察する。用言のアクセントは名詞と同様に、文節単位で最初から2音節までが高く発音されるもの（ $\alpha$ ）、文節単位で次末音節のみが高く発音されるもの（ $\beta$ ）の2つの型が対立しており、活用に伴って音調交代を見せる。活用時の音調型の交代を起こすものには、語幹のアクセントおよび語尾の種類などが関係しており、慶尚道諸方言と緊密な関係にある。 $\alpha$ には、語尾が付いて文節が長くなっても基本的には音調型の交代はない。これに対して、 $\beta$ の1音節語幹は語尾の種類によって音調交代を見せる。また、2音節語幹の中で、語幹末母音が-(C)i-の例は、母音で始まる語尾が付くと語幹母音の脱落と共に文節全体で[○◎]◎と音調交代を見せる。音調交代を見せる $\beta$ の1音節語幹はもともと $\beta$ に属したのではなく、音調交代や所属語彙などを考えると、アクセント変化により $\beta$ に移行したものと結論付ける。

[D-4]

韓国語巨済方言のアクセント

孫在賢

朝鮮半島東南部の慶尚南道の南海上にある巨済（コジエ）市は、済州島に次ぐ韓国で2番目に大きな島である巨済島を市域としている地域である。本発表では、巨済市の巨済面と鵝州（アジュ）洞の2地点について、これまでの調査で明らかになったアクセントタイプを取り上げ、周辺地域を含め、これら地域におけるアクセントタイプの分布およびその変遷のプロセスをたどることを目的とする。具体的には、（1）アクセントタイプ、（2）環境（言い切り形と接続形）による音調型の違い、（3）周辺方言からみる合流変化、の主として3点を明らかにする。

[D-5]

鳥取県倉吉方言における名前のアクセントの変化—中高型アクセントの消失—

儀利古 幹雄・桑本 裕二

鳥取県倉吉市は鳥取県中部に位置する市であるが、倉吉方言では東京方言とは異なり、3モーラの名前が中高型アクセントで発音される傾向が強い（例：えみ<sup>3</sup>こ、ひろ<sup>3</sup>し、みき<sup>3</sup>お）。本発表では、倉吉方言話者に対する発話調査を実施し、倉吉方言の3モーラの名前における中高型アクセントの生起頻度が世代が下るにつれて低下することが観察され、通時的に消失の方向へ向かっていることを示す。また、このような中高型アクセントの消失というアクセント変化は、東京方言の影響を受けての結果であることを示す。具体的には、東京方言において頭高型で発音される名前（例：えみ<sup>3</sup>こ、ひろ<sup>3</sup>し）は、倉吉方言においても頭高型で発音されるように変化し、東京方言において平板型で発音される名前（例：みき<sup>0</sup>お<sup>0</sup>、めぐみ<sup>0</sup>）は、倉吉方言においても平板型で発音されるように変化していることを計量的に示す。

[D-6]

幼児の連濁の獲得に関する横断的研究—語種とライマンの法則を中心に—

杉本 貴代

連濁とは、二つの単語を複合する際に後部要素（主要部）の語頭の無声阻害子音が有声化する現象である（例 “いちご”+ “はさみ”→いちご<sup>3</sup>ば<sup>3</sup>さみ）。成人対象の研究から、一部の例外を除き、複合語の主要部が①和語かつ②有声阻害子音を含まない語である場合に連濁は生起すると定義されてきた。子どもはどのように連濁を獲得するのだろうか。子どもは複合語の産出においていつごろから連濁するようになるのか。その際、連濁適用の2条件（①語種の区別、②ライマンの法

則)に基づく規則を用いているか。これらの点について検討するために幼児3学年を対象に複合名詞産出課題による実験を行った。結果、どの語種も全く連濁しない段階から徐々に連濁すべき和語を連濁できるようになる発達過程であることが明らかになった。幼児はライマンの法則に従うが、成人のような語種の区別に基づいた規則を用いておらず、事例ごとに連濁を獲得している可能性が示唆された。

[D-7]

マレー語における愛称語形成と韻律構造

橋本 大樹

基体の一部を削除することで新たな語を作る短縮語形成は、基体の性質によって2種類に分類可能である。1つは基体が普通名詞である場合である。例えば、普通名詞「ビルディング」から「ビル」という短縮語を作る様なパターンが挙げられる。もう1つは基体が人名である場合である。例えば人名「大樹」から「だいちゃん」を作る様なパターンが挙げられる。本研究では後者の人名を基体として持つ短縮語形成のことを愛称語と呼び、マレー語における愛称語形成の性質(出力形式の長さ・無標性の表出)について明らかにする。

本研究では先行研究の知見に基づき、短縮語形成は韻律構造に基づいて行われている語形成(Prosodic Morphology)の1つであると考え。その際に、マレー語の愛称語形成は日本語の短縮語形成(橋本 2012)同様、基体の持つ韻律構造のうち韻律語以下で初めに分岐する韻律範疇に言及することで出力形式の長さが決定していることを主張する。

[D-8]

商標登録における音声的類似——予備的考察——

上田 功・江戸 智美

本発表では商標登録にどのような問題があるのかを、特にカタカナ表記語の商標認定に焦点をあて、音声学・音韻論の立場から論ずる。現行の商標登録法では、海外から申請があった場合、英語等原語の発音をカタカナに字訳せねばならないので、原語では異なる2語であっても、表記では類似したものになるケースがある。またデータベースの事例を分析すると、認定には一定の傾向があり、次の4点が、判断を左右する要因であると考えられる。

1. 音節の核母音の共鳴度
2. 音節頭子音の種類
3. 語中での位置
4. 語の長さ

またこのような傾向にもかかわらず、これらの条件において対等であると思われる申請が、承認されたり却下されたりしている事例が認められる。

以上から、現行の商標認定は、認定の判断に一定の傾向はあるものの、審査官の主観によって判断が異なるケースがあり、ために法の下での平等を欠く可能性があるとして指摘することができる。

【E会場】司会：(1-2)滝浦真人 (3-4)加藤重広 (5-6)時本真吾 (7-8)萩原裕子

[E-1]

日本と中国における依頼行為のとらえ方—ポライトネスの観点から—

本研究では依頼行為を負担の大きさと本当の依頼者が誰であるかにより4つの場面に分け、大学生が上下関係と親疎関係によってどう反応するかを質問紙調査で解明した。

「気楽」と「負担」について両国のとらえ方は似ているが、「親しそう」のとらえ方は異なっている。日本人は上下関係と親疎関係の両方に激しく影響される一方、中国人は親疎関係にやや影響されるが、上下関係に影響されない。日本人は「上疎→同疎→上親→同親」の順番で使用頻度が下がっていくパターンの意味公式と言語形式を多用し、中国人はそうならない意味公式と言語形式を多用する傾向がある。

日本人も中国人も女性のほうが男性より被依頼者にとっての負担を小さく感じるという結果を得た。本人/第3者について、日本人は第3者の頼みごとならば、本人の頼みごとより気楽に頼め、親しそうな態度を示し、被依頼者にとっての負担を小さく感じる点で、中国人のとらえ方とは逆になっている。

[E-2]

再依頼における日本語と中国語のポライトネス・ストラテジーの違い

曹 芳・田中 大輝

本研究では、「一度依頼を断られた相手に再度依頼を行う」という、相手に対するより細かな配慮が必要となる状況において、日本語母語話者と中国語母語話者が依頼の目的を達成するためにそれぞれどのようなポライトネス・ストラテジーを用いるかに着目した。各母語話者を対象としてロールプレイ調査を行った結果、どちらも相手のネガティブ・フェイスの侵害をできるだけ避けようとする点は同じであるが、日本語母語話者は条件を緩めることで依頼の負担を小さくし、それによって相手のネガティブ・フェイスの侵害を最小にしようとする傾向があるのに対し、中国語母語話者は被依頼者側に理解や共感を求めることで相手のネガティブ・フェイスを侵害する意図がないことを伝えようとする傾向があることが分かった。外国語学習の際にはこのようなポライトネスの表し方の違いを念頭に置くべきであるし、指導者はこの違いを学習者に意識させるような工夫が必要である。

[E-3]

日本語と韓国語の「否定の応答文」における述語形式のズレ

高 恩淑

日本語と韓国語は、「否定の応答文」において述語形式の現れ方が異なる。例えば、韓国語では、現在までに動作が完了していない状態を表す場合、否定の意味を持つ「*an*」を用いる<未実行>と、不可能の意味を持つ「*mos*」を用いる<未実現>に分けられるが、日本語は両者とも同じ動詞の形態「テイナイ」が用いられる。これは日本語と韓国語の「否定の応答文」における重点の置くところが異なるからである。韓国語は、発話の現時点における結果に重点が置かれるため、その要因が動作主の意図欠如によるもの（<未実行>）なのか、それとも動作主の期待や意図に反する不都合によるもの（<未実現>）なのかを形態上において示す必要がある。しかし、日本語の場合は、発話時までにはまだ動作生起がないことだけが重んじられ、他のことについては無関心であるため、わざわざその要因を示す必要はない。よって、<未実行>と<未実現>が同じ形態「テイナイ」で表される。

[E-4]

米国大統領演説におけるレスポンス誘出のための発話連鎖の連結  
—話し手と聴衆間のインタラクションの視点から—

Atkinson (1983)に始まる一連の研究は、相互行為的視点から演説を研究し、「話し手はどのような発話を用いて聴衆からレスポンスを誘出するのか」を分析した。しかし、それらはレスポンスが起こる直前の発話を個別に分析することに多くの関心に向け、各レスポンス直前の発話間の関連性については追究していない。だが、話し手は明らかにそれらの発話を関連づけることで、より広範囲の発話連鎖をレスポンス誘出のための効果的なストラテジーとして構築している。それが最も顕著に表れているのが、話し手がレスポンスを「相次いで」誘出する場合である。本発表では、演説の中でのこのような話し手－聴衆間の連鎖を“MRES (multi-response-elicitation sequence)”と名づけ、それがどのような発話により形成され、どのような連鎖構造をもつか検証していく。分析結果から、MRESはある規則性に基づき話し手と聴衆によって産出された相互行為的連鎖であることを示す。

[E-5]

カクチケル語の基本語順と選好語順の関係について

安永 大地・矢野 雅貴・小泉 政利・八杉 佳穂

カクチケル語は、VOS（動詞-目的語-主語）/SVO/VSO/OVS といった語順が可能な言語であるが、文献学的に VOS が基本語順で、それ以外は派生語順だとされている。このように自由な語順交替を許す言語では、基本語順がどれであるかを調べるという研究が盛んに行われている。基本語順を探る方法の1つに、文処理中の脳の反応を観察するという方法がある。基本語順から派生した語順では、文構造中に filler と gap の依存関係が含まれるために、その依存関係の構築を反映した ERP 成分、P600 が観察される。たとえば、もし VOS が基本語順で SVO が派生語順であれば、SVO 語順で P600 が観察されると予測され、SVO が基本語順であれば、VOS 語順で P600 が観察されると予測される。カクチケル語話者による文聴解時の事象関連電位を分析した結果、SVO 語順で P600 が観察された。この結果から、カクチケル語の基本語順は VOS であることが、文献学的事実、行動指標データと合わせて、生理指標データからも得られたと言える。

[E-6]

依存関係の構築における予測処理について - ERP を指標とした日本語譲歩文の研究 -

立山 憂・矢野 雅貴・坂本 勉

本研究では、事象関連電位を指標とした実験を行い、副詞「たとえ」を含む譲歩文（例：たとえ雨が降っても出かける。）の理解時における依存関係の構築過程について調べた。実験の結果、依存関係を適切に構築するために必要な要素を予測する処理、および予測された要素と入力された要素の不一致を反映すると見られる ERP 成分が観察された。従って、このような譲歩文を理解する際の依存関係の構築過程において予測処理が行われていることが明らかになった。

[E-7]

gap-filler 依存関係の処理について - 文脈を用いた日本語分裂文の ERP 研究 -

矢野 雅貴・立山 憂・坂本 勉

本研究は、日本語の分裂文における空所(gap)とその補充要素(filler)との関係、すなわち、gap-filler 依存関係の処理について検討した。その際、文脈を用いて filler に対する予測可能性を統制した上で、読文時間・事象関連電位を指標とした実験を行った。実験の結果、主語分裂文の方が、目的語分裂文よりも処理負荷が低いことが明らかになった。よって、日本語分裂文における gap-

filler 依存関係の処理負荷を説明する仮説として、線形的構造仮説よりも構造的距離仮説の方が妥当であることが示された。

[E-8]

### 否定 why 疑問文の習得に関する縦断研究

深谷 修代

本発表では、英語を母語とする子どもがどのような過程を経て否定 why 疑問文を習得するのか分析する。Rowland and Pine (2000)は、CHILDES コーパスに収録された Adam の wh 疑問文を3つのタイプ((1) a. Wh Aux S V? b. Wh S Aux V? c. Wh S V?)に分けて分析し、(1c)の発話数が減少する一方で(4歳の時点でも30%ほど占める)、(1a)が増加することを示している。本発表では、Adam が発話した wh 疑問文のうち否定 why 疑問文に焦点を当てた分析を行う。その結果、Rowland and Pine が示した wh 疑問文全体の特徴とは異なり、(1c)は2歳10ヶ月から3歳2ヶ月までに限定されていたことを示す。そしてこの時期は、主語や動詞の有無に関わらず Why not が重要な役割を果たしていたことを証明する。また代名詞主語の I はすべて me だったことから、主語が VP の指定部に留まっていると仮定する。その後、3歳後半までは(1b)、4歳以降になると(1a)へと発達し、否定 why 疑問文では3つのタイプそれぞれが優勢な時期が存在したことを提示する。

【F会場】司会：(1-2)藤井友比呂 (3-4)宮本陽一 (5-6)橋本喜代太 (7-8)長谷川宏

[F-1]

### Clausal arguments in Irish

Hideki Maki, Dónall P. Ó Baoill

This paper investigates the properties of clausal arguments and chain patterns that arise from extraction from these clausal arguments in modern Ulster Irish (Irish, hereafter). Basing our arguments on the newly found facts, we argue (i) that Irish grammar should contain a condition such as the Condition on A'-Resumption Chains, (ii) that the subject position is not a properly governed position, (iii) that there seems to be a COMP-Predicate (verb+INFL) agreement in human language, and (iv) that the chain pattern (aL, that, RP), which has not been reported in the literature except Maki and Ó Baoill (2011), is real as the sixth chain pattern in Irish in movement constructions with one embedded clause.

[F-2]

### Quantifier interactions in modern Mongolian

Lina Bao, Megumi Hasebe, Hideki Maki

This paper investigates quantifier interactions in Mongolian, and claims that a quantifier takes scope over another quantifier by virtue of the reflexive pronoun *yen* related to it. We argue that in Mongolian, the reflexive pronoun *yen* moves to the closest quantifier/wh-phrase in the LF component, and functions as a distributor of the universal quantifier (or the pair of the universal quantifier and the existential quantifier). Therefore, c-command is irrelevant in scope determination between the two quantifiers at issue at the “S-Structure” representation in Mongolian. This suggests that there are at least two different ways of scope determination in the world languages, and the crucial factor is the existence of overt syntactic elements such as an reflexive pronoun in the language.

[F-3]

モンゴル語の間接疑問縮約構文に関する研究：格一致効果の観点から

Merchant (2001)は、間接疑問縮約構文では一般的に残余要素と先行節における対応要素との間で格一致効果が観察されることから PF 削除分析を支持しているが、モンゴル語の間接疑問縮約構文では残余要素に義務的に対格標識が付与される。一方、モンゴル語においても埋め込みを伴わない主文疑問縮約構文では格一致効果が観察されることから、間接疑問縮約構文における残余要素の義務的な対格標識は主節の要素が付与していると考えられる。そこで、本発表ではモンゴル語の間接疑問縮約構文に対し、省略を受ける節が[Spec, CP]に基底生成された *wh* 句と空の TP から構成されるとする Chung, Ladusaw, & McCloskey (1995)の LF コピー分析を採用する。そして、Chomsky (2000)の位相不可侵条件の下では位相の指定部と主要部は上位の位相主要部から可視的であることを基に、残余要素の義務的な対格標識は主節の *v* が付与していると提案する。

[F-4]

文断片の直接生成分析—トルコ語目的語からの証拠—

永次 健人・菅沼 健太郎

文断片 (Sentence Fragment) は、標準的には、文からの削除により生成されることが考えられ、近年では、文断片は焦点移動をし、その痕跡を含むTPが削除を受けるとされている (Merchant 2004)。一方、文断片は文相当の統語構造を持たず、そのまま生成されるという直接生成分析も提案されてきた (Culicover and Jackendoff (2005))。本発表では、トルコの文断片での対格マーカの振る舞いが削除分析では説明されず、直接生成分析の証拠となることを論じる。

A: Ahmet her gün ne yiyor?

B: çikolata/çikolata-*yı*.

“アフメット毎日何を食べるの?” “チョコを (non-specific)/チョコ (specific).”

その上で、Culicover and Jackendoff (2005)のアプローチに基づく分析を提案する。

[F-5]

副詞節内における演算子の派生に関する考察

前田晃寿

Larson (1990)は、一つの派生には一つの演算子のみが存在すると仮定する副詞節に対する移動分析を提唱した。それに対して、本発表では、一つの派生には二つの演算子が共存すると仮定する。加えて、時・場所・理由・条件を表す副詞節内に演算子が存在することを確認し、これらの副詞節内に存在する演算子の特徴について議論を行う。このとき副詞節内における演算子の移動は、前置詞によって与えられる格・ $\theta$  役割によって駆動されるという Larson (1990)の仮定を推し進めることによって考察を行う。さらに本発表で考察した仮定と、分配読みに対する Agree に基づいた分析(関西言語学会第37回大会で提案したメカニズムを修正したもの)に従い、Kayne (2002)が提案したタイプの移動が素性に基づいた相対的的最小性条件に関与しない特殊な移動であることを示す新たな事実を提示する。

[F-6]

日本語の時制形態素の Lexicalist 的分析

平田 一郎

英語の語彙動詞や (完了・受け身の) 助動詞が時制形態素を持っている場合、形態的な変化をあらかじめ受け、V のスロットに導入されるという分析がある (Lexicalist による分析)。これに対し日本語では、V と T は別々の形態素としてそれぞれのスロットに導入され、主要部移動、ま

たは PF での形態的併合によって派生的に動詞が時制形態素を持つようになるという分析が一般的である。本発表では、これに対し、日本語でも時制動詞（より詳しくいえば、動詞と時制辞の間にある機能範疇）があらかじめ T の形態素を担って句構造に導入されるという、Lexicalist 的分析を提案する。この分析を支持する証拠として、等位接続構造における「が/の交替」の制約を指摘する。主語-述語の連鎖が連結された等位接続構造が名詞句を修飾する場合、左の等位節では「が/の交替」が適用できない（\*[太郎の泣き&次郎が怒った]理由）。この制約が、提案する Lexicalist 的分析により説明されると主張する。

[F-7]

極小主義モデルに基づく空移動仮説：wh 疑問文における主語と目的語の非対称性について

田口 祐衣

本発表は、空移動仮説を極小主義モデルの枠組みにおいて再定式化し、それによって主語の wh 疑問文と目的語の wh 疑問文の様々な相違点(i.主語と助動詞の倒置、ii.that-trace 効果、iii.関係代名詞の省略)を包括的に説明することを目的とする。相主辞(C 及び v\*)ではなく T(及び V)が端素性や一致素性を保持しているとし、また相主辞の特性として、これらの素性が削除されることができなかった場合に、その素性を引き付けると主張する。主語の wh 疑問文の場合、主語の wh 句は wh 素性と  $\phi$  素性を持っており端素性と一致素性の両方を削除することができるため Spec TP に留まる。対して、目的語の wh 疑問文の場合は、主語は  $\phi$  素性しか持っておらず端素性を削除することができないので、相主辞(C)が端素性を引き付け、その端素性が目的語の wh 句を引き付ける。そのため目的語の wh 句は Spec CP まで移動する。

[F-8]

指定的疑似分裂文の派生: カートグラフィー・アプローチ

遠藤 喜雄・岩崎 永一

Den Dikken, Meinunger, & Wilder (2000)は、あるタイプの指定的疑似分裂文が、疑問文とそれに対する答えという対話形式の構造を持つと主張している。彼らの主張を出発点として、それを補強する新たな事実を指摘し、次に彼らの分析の問題点を指摘する。この問題点を解決するために、本発表では、カートグラフィーの類型論的な観点から次のような派生を提案する：(i)まず、wh-節がトピック句(TopP)の指定部に基底生成される。(ii)次に、この wh-節と同一指示の関係にある音形を持たない DP が小節内から文の定形の情報を示す FinP 指定部に移動することにより、文に主語が必要であるという要件 (EPP) が満たされる(cf. Rizzi and Shlonsky 2005)。(iii)この音形を持たない DP は、さらにフォーカス句(FocP)に移動する。さらに、対応する日本語表現を吟味しながら、従来の分析の問題点を指摘し、指定的疑似分裂文の特質を議論する。

【G 会場】 司会：(1-2)上田由紀子 (3-4)奥聡 (5-6)本間猛 (7-8)栗林裕

[G-1]

Different Triggers for Successive-Cyclic Movement in Sinhalese and Japanese *Wh*-questions

Hisashi Morita

By comparing *wh*-questions in Sinhalese and Japanese, this paper will show that there are at least two ways to initiate intermediate stages of successive-cyclic movement in natural language: one with an *edge* feature (*EF*) and one with Agree. *Wh*-questions in the two languages are very similar in that they are both *wh*-in-situ languages and exhibit the intervention effect. However, there are also significant differences: (i) long-

distance interpretation of ‘why’, (ii) the availability of long-distance scrambling in *wh*-questions, and (iii) focused (or unfocused) interpretations of *wh*-questions. The paper will attribute the differences to the use of Agree (of [Focus] features) to trigger successive-cyclic movement in Sinhalese. In contrast, Japanese employs [*EF*], which does not cause Agree between intermediate C and *wh*-expressions.

[G– 2]

External Cause and the Structure of *vP*: A Case from *Sar(u)* Expressions in Iwate Dialects

Fumikazu NIINUMA, Hideya TAKAHASHI

(3) It has been widely assumed in the literature that there are two types of intransitivization processes available in natural languages, namely de-causativization and anti-causativization. On the other hand, Alexiadou (2010) proposes a third type of the process in which intransitivization is possible when a special morpheme is located in the Voice head. She also argues that this special morpheme makes possible the suppression of the external Cause argument of the predicate.

In this study, we will show that the so-called *sar(u)* expressions in Japanese provides a strong piece of empirical support for Alexiadou’s claim, and will try to explore its implications for linguistic theory as well as the understanding of Voice-related phenomena in Japanese.

[G– 3]

Licensing Null Associative Plurals in Kaqchikel

Junya Nomura

This presentation gives three pieces of evidence that associative plurals in Kaqchikel must be licensed by agreeing with a plural feature on the verb. The first evidence comes from the agreement pattern of coordinated arguments. The second evidence involves the so-called Agent Focus constructions. In these two constructions, not every DP can agree with the verb, and only a DP that can agree with the verb, can be associative plurals. The last evidence concerns elliptical answer. Associative plurals can be used as an elliptic answer only when the antecedent verb contains a plural agreement, while ordinary plurals does not require such an antecedent. This asymmetry is mysterious without the licensing condition for associative plurals, but explained straightforwardly with that condition.

[G– 4]

A-reconstruction as a Type-sensitive Phenomenon

Yoshiyuki Shibata

This paper shows that the difference between elements that exhibit A-movement reconstruction effects (A-reconstruction) and ones that do not resides in their semantic types, adopting Landman’s (2004) Adjectival Theory of indefinites which claims that indefinites are generated at predicate of type  $\langle e, t \rangle$ . Then, the paper argues that elements of type  $\langle e, t \rangle$  can but ones of type  $\langle \langle et \rangle, t \rangle$  cannot undergo A-reconstruction process, based on English data. This type-sensitive approach to A-reconstruction correctly predicts that even indefinites are unable to undergo A-reconstruction when they are forced to be interpreted as being of type  $\langle \langle et \rangle, t \rangle$  (e.g. subjects of individual-level predicates), and captures the insight in Boeckx (2001) that elements with A-reconstruction effects are the same as elements that can appear in *there*-constructions.

[G– 5]

ジンポー語における成節鼻音の声調について

倉部慶太

本発表では、ジンポー語 (チベット・ビルマ語派：ビルマ北部、中国雲南省) に観察される成節鼻音の声調を対象として音韻分析を行う。そして、この音節には音声的に三種の声調 ([L], [M], [H]) が現れうるが、これらの声調は音韻的には二種の声調 (/L/, /H/) に還元できると主張する。その根拠として、発表者は声調素の相補分布および否定辞の変調からの証拠を提示する。最後に、発表者はこの現象を非強勢音節における声調素の中和であると考察し、この現象が通言語的に観察される一般的な現象の一種であることを指摘する。

[G-6]

ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における「アクセント句」と「句音調」の提唱

三村竜之

サンネス方言は語に主強勢を担う音節が必ず一つあり、高平調と下降調のいずれかが現れる。本発表では、一、二音節語のみならず、様々な強勢の型を持つ多音節語も広く考察することで音韻論的に有意義な音調とそうでない音調 (広義のイントネーション) との分離を行い、また強勢と音調の間の従属関係に着目し次の結論を導く: サンネス方言のアクセントは、主強勢を担う音節における音調の下降の有無が音韻論的に有意義であるストレスアクセントの一種である。

アクセント抽出の際に分離した「広義のイントネーション」は音声学的に不自然な変動を示すが、この音調の本質を捉えるべく本発表では「アクセント句」とそこに被さる「句音調」という概念を新たに提案する。語に固有の属性としての音調 (アクセント) とは別に句の属性としての音調を設定することで、語はもちろん、句や文における音調をも合理的かつ正確に記述することが可能となる。

[G-7]

注意概念を用いたソ系の直示用法と非直示用法の統一的分析

平田 未季

本発表は、注意 (attention) という概念を用いることで、日本語指示詞の統一的分析で残された問題とされる「中距離指示」のソ系が再分析できること、また注意概念を通してソ系の直示用法と非直示用法が統一的に分析できることを主張する。指示詞が使用されている自発的な相互行為場面を見ると、ソ系は、聞き手が視覚的注意を向けていない対象を指すトルコ語の *şu* とは反対に、既に聞き手の視覚的注意が向けられている対象を指す。Diessel (2006) は、「聞き手の注意」は、発話場面では対象への物理的視線と、言語的な談話世界では談話内の言語的対象に向けられる注意と解釈されると論じた。発話場面で聞き手が視覚的注意を向けている対象を指すソ系は、談話内では聞き手が注意を向けうる既に談話に導入された言語的対象を指す前方照応用法 (anaphoric use) を持つ。本発表は話し手が意図する対象に聞き手が注意を向けているという状態がソ系の直示用法と非直示用法の前提となる状態であると考えられる。

[G-8]

交差分類と述語論理による 5 文型の再編成

川嶋 正士

本発表では、5 文型の編成上の問題点について考察を加え、代案を提唱する。

文型の利点は、S・V・O・C という 4 つの「文の要素」で文の種類を分類できることにある。これらを「±O (自・他動詞)」「±C (完全・不完全動詞)」により交差分類すると、第 IV 文型以外は、以下の通り、整然と分類できる。

	-O (自動詞)	+O (他動詞)
-C (完全動詞)	SV (第 I 文型)	SVO (第 III 文型)
+C (不完全動詞)	SVC (第 II 文型)	SVOC (第 V 文型)

(1)

第 IV 文型は、述語論理的に見ても、1 項または 2 項述語により形成される他の 4 つの文型とは異なり、3 項述語である。

5 文型を動詞の分類ととらえ、交差分類に加え述語論理を用いて再編成すると、以下のとおり、簡潔にまとめられる。

述語	完全	不完全
1 項	Verb Type I : SV	Verb Type I' : SVC
2 項	Verb Type II : SVO	Verb Type II' : SVOC
3 項	Verb Type III : SVOO	

(2)

## <<ワークショップ Workshops >> (2013 年 6 月 16 日)

【A 会場】  
[W-1]

### Syntactic Structure and the Interpretation of Tense and Aspect

Organizer and Moderator: Nobuko Hasegawa

Tense interpretation is relevant to Speech Time, Event Time, Reference Time, Clause Types, Predicate Types, Modalities, etc. In this workshop, assuming multiple functional categories relevant to tense and aspect, we will explore what factors are actually syntactically represented, what reading is accounted for syntactically, semantically, or pragmatically, and how the differences in tense systems between English and Japanese can be captured. The phenomena taken up in three presentations include: (i) the tense interpretation of subordinate clauses of various kinds (complement clauses, relative clauses, adverbial clauses, counterfactuals, etc.); (ii) the interactions of the tense/aspect interpretation and the presence/absence of particular items (i.e., a modality, a temporal adverb and a lexical subject).

[W-1-1]

#### Tenses and Sequences of Tenses: When Past doesn't Past-shift

Tim Stowell

I will discuss three puzzles associated simultaneous past (SP), where past or imperfect tense conveys simultaneity rather than past-shifting. (1) What is the right analysis of SP? Prior proposals include positing a 'zero' tense (distinct from present and past), a 'tense deletion' rule, and the idea that tense morphemes are not, in themselves, time-shifters. Possible parallels with bound pronouns will be discussed. (2) Are there different types of SP, involving different kinds of grammatical mechanisms? Evidence of SP in non-SOT languages such as Japanese will be considered. (3) Is there an analogue of SP in the case where past conveys counterfactuality, and does it shed light on the analysis of SP?

[W-1-2]

#### Tense and Aspect of Japanese Root Modals

Satoshi Tomioka

The so-called *Actuality Entailment* of some root/volitional modals in past tense is claimed to be tied to the perfective-imperfective distinction in the past tense paradigm. According to Bhatt (1999), past-tensed ability modals with eventive interpretations come with such entailments, and Japanese seems to behave as

expected: *Mako-(ni)-wa kinoo sono-nanmon-ga toketa* ‘Mako was able to solve (and did solve) the difficult problem.’ However, the status of this actuality meaning in Japanese is better characterized as a conversational implicature, as it is cancelable with an expression like *tokoo-to omoeba*. The questions to be addressed are: (i) what is responsible for the contrast with English, in which actuality cannot be canceled? (ii) what semantic/pragmatic inferences make the actuality implicature possible?

[W-1-3]

### Clause Types, Predicate Types, and Tense Interpretation in Japanese

Nobuko Hasegawa

The tense morphemes of Japanese, *Ta/Ru*, mark the Past/Present distinction in main clause indicatives; however, they mark the Perfect/Imperfect distinction in subordinate clauses, indicating that Japanese may not exhibit the Sequence of Tense phenomenon. Furthermore, in adnominal clauses, *Ta* may mark Past and indicate resultative perfect with unaccusatives (i.e., predicates with a non-agentive subject), which can be paraphrased with *Te-i-ru*. These facts will be accounted for with the layered functional structure, ForceP-FinP-TP-AspP. That is, tense interpretation obtains through the interactions of these FCs—clause types marked in the C-system (ForceP-FinP), TP, which refers to Speech Time, if present, and AspP, which gives rise to the property (resultative perfective) reading in adnominal clauses without TP and above.

【E 会場】

[W-2]

### ユーラシア北東部諸言語の名詞項標示

企画：江畑 冬生 司会：永山 ゆかり コメンテータ：風間 伸次郎

本ワークショップで名詞項として扱うのは、自動詞主語(S)・他動詞主語(A)・他動詞目的語(O)の3つである。ある名詞項に対し2通り(以上)の標示が可能な言語がある(特にOに対して複数通りの標示が可能な言語は数多い)。そのような言語の記述では、複数の選択肢からの標示の決定が、定性(definiteness)や特定性(specificity)などの単一の語用論的要因に求められることがしばしばある。しかし言語の実際を観察すると、語用論的要因だけでなく、形態法・統語法・名詞句タイプの違い・情報構造など、様々な要因が関わっている。

本ワークショップでは、ユーラシア北東部に分布するアリュートル語・ユカギール語・サハ語の名詞項標示について、一次資料から具体的に観察する。各言語の標示を決める様々な要因を整理したうえで、複数の要因が複合的に関わっている点、各要因の優先順序が言語ごとに異なっている点に特に注目していく。

[W-2-1]

### アリュートル語の自他両用動詞における名詞項標示

永山 ゆかり

チュクチ・カムチャッカ諸語の1つであるアリュートル語では、SとOは絶対格で、Aは能格で現れる。動詞の自他は語彙的に決まっており、自動詞活用のみする動詞、他動詞活用のみする動詞、自他両用動詞(*labile verbs*)に大別できる。本発表では従来の記述では自動詞あるいは他動詞とされてきたものの中にも自他両用動詞が含まれることを指摘した上で、自他両用動詞の大まかな特徴を示す。自他両用動詞は自動詞文と他動詞文との主語の対応により、S=A型およびS=O型に分けることができる。S=A型の動詞には、自動詞文においてOに相当する項を具格や沿格などで

表わしうるものがあるが、〇に相当する項を付加することができないものもある。このように自他両用動詞の性質は一様ではなく、項標示については複合的な要因が関わっている。

[W-2-2]

コリマ・ユカギール語の名詞項標示

長崎 郁

コリマ・ユカギール語の名詞項は、主語＝主格、目的語＝対格のような一対一の対応ではなく、それぞれが複数の標示形式を持つ。本発表ではこのような標示形式の選択に関わる様々な要因について考察を行う。この問題は先行研究によりある程度まで整理されているが、その詳細は未だ議論の余地がある。

この言語では、名詞項の内容の談話上の重要度によって定動詞文と焦点構文という構文タイプが選択され、同時に名詞項標示の選択肢の範囲が決まる。定動詞文では目的語が主格、対格、具格で現れうる。この選択は主語と目的語の関係という global な制約と、目的語自体の名詞句タイプ、構造・定性という local な制約により決まる。焦点構文では自動詞主語／目的語が焦点接辞、主格で現れる。この選択には local な制約が働く。談話機能をもつ標示形式をもつこと、global な制約と local な制約の共存がこの言語の特徴であると考えられる。

[W-2-3]

チュルク諸語における目的語格選択の要因：サハ語を中心に

江畑 冬生

チュルク諸語の1つであるサハ語の目的語には、対格・分格・主格が現れる。対格標示は（語用論的な差異を無視すれば）いかなる目的語にも可能であるため、最も無標であると見なせる。分格標示は、命令法における不定の対象になされる。言い換えれば、分格標示が施されるのは主として語用論的要因による。主格標示についても、従来は語用論的要因のみから説明されてきた。しかし実際には、主格標示には形態法や名詞句タイプが優先して働き、これらの要因が働かない場合にはじめて語用論的要因が効いてくる。

サハ語・トルコ語・トゥバ語という3つのチュルク諸語について主格／対格標示の要因を比べた場合、サハ語は先に述べた2つの要因が強く働くが、トルコ語では統語的要因が、トゥバ語では語用論的要因が最優先であることが分かる。同系の言語であっても標示選択に関わる要因の優先順序が異なっている点は興味深いと言える。

## <<ポスター発表 Poster presentations >> (2013年6月16日)

【ポスター会場1】

[P-1]

「形容動詞の「ナ」共起と「ノ」共起のコーパス基盤調査」

李 在鎬

形容動詞の「ナ」と「ノ」による名詞修飾節の使用実態を大規模コーパスで調査した。調査データとして『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用し、トークン頻度 108,178、タイプ頻度 1,225 の用例を抽出した。そのうち、頻度 10 以上の形容動詞（トークン頻度 21,734、タイプ頻度 277）に対して詳細な分析を行った。データ分析の方法としてクラスタ分析と主成分分析を使い、

グループ分けを行った上、グループ間で語義数や語彙親密度に差が見られるか分散分析した。調査の結果、3つのグループの存在が明らかになった。グループ1(e.g.,最高、大量、大型)はノとの共起が顕著で「量の概念」を表すものが多く、グループ2(e.g.,不明、平等、異質)はナとノのいずれとも共起するグループで「関係概念」を表すものが多い。グループ3(e.g.,複雑、厄介、親密)はナとの共起が顕著で、「出来事的概念」を表すものが多い。一元配置の分散分析を行ったところ、語義数においても有意効果が確認された( $F(2,274)=3.873, p=.002$ )。

[P-2]

#### 中国語の全称量化解釈の仕組み

王 慶

中国語で全称量化現象を研究するさいに、往々にして *dou* (都) が注目の的となり、文中の他の要素の分析がおろそかにされがちである。本発表では、全称量化解釈は、*dou* (都) のみならず、項・述語などの諸要素によるインターアクションの結果だと考え、その解釈が生まれる仕組みを探る。

まず、複数解釈の NP を AND 集合と WITH 集合という2種類の形で捉え直した。メンバーが並立関係の AND 集合だからこそ、分配読みないし全称量化の解釈が派生する。その代表例は「每个 NP」である。一方、「所有的 NP」には分配読みも集合読みもとれる。WITH 集合(メンバーが協力関係)と AND 集合の2つの可能性があるからである。つぎに、いわゆる *collective predicates* は *together* 素性を含んでいるため、WITH 集合と共起しなければならない。要するに、*together* 素性は、WITH 集合を認可しなければならない。結局、*distributive* 素性をもつ *dou* (都) の役割は、AND 集合を認可するということにすぎない。

【ポスター会場2】

[P-3]

#### Working memory or pitch sensitivity? Pitch accent perception by native speakers of Japanese

Seth Goss

Spoken language perception may be constrained by a listener's cognitive resources, including verbal working memory (WM) capacity and basic auditory perception mechanisms. For Japanese listeners, it is unknown how these resources are involved in processing pitch accent at the lexical level. This study examined the extent to which native speakers of Japanese could identify and categorize Japanese words by pitch accent, and how verbal WM and nonlinguistic pitch sensitivity influenced this ability. Results showed that native speakers were more successful at judging pitch accent accuracy ( $M=93\%$ ) than categorizing ( $M=58\%$ ) pitch by pattern. Furthermore, nonlinguistic pitch sensitivity was a significant predictor in accurately identifying pitch accents, while verbal WM had only a slight relationship with accent perception performance.

[P-4]

#### 四モーラ豊語のアクセントの品詞による合流と品詞を越えた合流

高山林太郎

本発表では「4モーラ豊語」のアクセントの合流例を報告する。一つ目は、青森市・盛岡市において「島々(が)」の類が持つ昇り核の位置が、前部(=後部)要素の核の有無と位置に動機づけられて2,3拍目に分かれた状態から、3拍目へと合流しつつある点を指摘し、「名詞」の合流例として示す。二つ目は、高知県高知市春野町・上町・安芸市において、「ピカピカ(と)、アカアカ(と)」の類が持つ下げ核の位置が1,2拍目に分かれて対立するのに対し、高知県土佐市や院

政期京都では1拍目へと既に合流している点を指摘し、「情態副詞」の合流例として示す。三つ目は、広島県尾道市・広島市で、1919年以前生れの話者では下げ核が3拍目にある「アカアカ（と）、島々（が）」の類が、1926年以降生れの話者では核が2拍目にある多数型の「ピカピカ（と）」の類に類推して2拍目へと合流している点を指摘し、「情態副詞」の合流に「名詞」が巻き込まれる例として示す。